

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 5 月 26 日現在

機関番号：32507

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2011～2013

課題番号：23730625

研究課題名(和文) 幼児期の身振り表現の発達における形態・文脈・他者視点の影響

研究課題名(英文) The Development of Gestural Expression in Childhood: The Influence of Form, Context, and Cognitive Perspective-Taking.

研究代表者

大神 優子 (OHGAMI, YUKO)

和洋女子大学・人間・社会学系・准教授

研究者番号：40452031

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,700,000円、(間接経費) 810,000円

研究成果の概要(和文)：幼児期における2種類の身振り変化(BPO表現からパントマイムへ、主観的身振りから客観的身振りへ)について、その変化の様相と関連要因について、幼児を対象とした個別面接実験によって検討した。その結果、BPO表現の変化は言語発達を指標とした全般的な認知発達や形態把握に関わる空間構成能力の発達とほぼ連動して生じるのに対し、主観的身振りからの変化はそれよりもやや遅れ、他者視点取得などの社会的要因が関与していることが示唆された。ただし、これらの変化は一律ではなく、課題や手続きによっても各要因の影響の程度が異なることが示された。

研究成果の概要(英文)：Three experiments were performed with children aged 3-5 years, to investigate changes in gestures during childhood. Previous research has reported that there are two types of gestural changes that occur at this time: a change from BPO (body part as object) expressions that imitate forms to pantomiming that imitates movement, and a change from performance-like subjective gestures to objective gestures. The time period of and factors relating to these changes were investigated. Results showed that the first gestural change occurs along with overall cognitive development (language, etc.) and the development of visuospatial cognitive abilities. By contrast, the latter change occurs somewhat later, and appears to be connected to social factors such as the ability to see things from others' viewpoints. However, these changes are not simple, and the extent of the influence of each of these factors differs depending on the experimental tasks and procedures.

研究分野：心理学

科研費の分科・細目：教育心理学

キーワード：教育心理学系 幼児 身振り 道具使用

## 1. 研究開始当初の背景

幼児期には、「ぶらんこって、ゆーらゆーらする」と言いながら身体を前後に動かしてぶらんこに乗っている様子を見せるなど、多くの身振りが用いられる。このような大人とは異なる身振り表現は、幼児期の間に変化していくことが報告されてきた。その変化の一つは、前述した演じる身振り(主観的身振り)から、自分の目の前の限られた空間でミニチュアのように表現する客観的身振りへとシフトしていくことである。さらに、幼児期には一過性に、道具を使うふりをする身振りで、脳損傷患者で見られるような BPO (body part as object) 表現が観察される。これは、実際にはさみを持たずに切るふりをする際に、実際の動作の再現ではなく、じゃんけんのチョキの形でさみ自体を表現してしまうといったものである。これは、さみのイメージを手で補助していると考えられている。実際に、成人を対象とした脳機能計測実験では、道具の形を表現する身振り(BPO)で道具の形態イメージが強く喚起されている可能性が示されている。このような補助としての身体表現も、やはり幼児期の間に減少していく。

これらの身振り表現の変化はいずれも幼児期に生じる発達的变化の一つとして捉えられてきた。しかし、これらの変化がどのような要因に支えられているのか、これらの変化のタイミングが連動するのかといった背景はまだよくわかっていない。その一因として、それぞれの身振り表現の変化が、異なる研究文脈で別々に検討されてきたことが挙げられる。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、幼児期の身振りの形態の発達的变化(説明対象を演じる主観的身振りから客観的身振りへ、説明対象を手で代用する BPO 表現から動作を再現するパントマイムへ)がいつ頃、どのように生じるのか、また、それらの変化が同時並行的に生じるかどうかを明らかにすることである。

さらに、それぞれの身振り表現の変化に影響すると考えられ、これまで身振り別に検討されてきた代表的な3つの要素、すなわち、形態、文脈、他者視点が、それぞれの身振り表現の変化にどのように関わるのかを検討することで、これらの身振り表現の関係を明らかにすることを目指した。

## 3. 研究の方法

### [研究1]

#### 2種類の身振りの変化時期の比較

3～6歳の幼児(一部実験では4～6歳児)を対象として、個別面接実験を実施した。2種類の身振り課題及び言語課題を実施した。

### (1)身振り課題

遊具身振り課題 絵カードで「ぶらんこ」「シーソー」など、主観的視点、客観的視点両方で表現できる遊具を提示し、それについて説明させ、このとき使用された身振りを主観的か客観的かで分類した。

道具使用身振り課題 絵カードで「はさみ」「コップ」など、BPO、両方で表現できる道具について使うふりをさせる。身振りの形態(BPOかパントマイムか)を分類した。

### (2)言語能力測定課題

絵画語い発達検査改訂版(PVT-R):4枚の絵から指示された語いに該当する絵を選択させる。標準化された手続きに従って実施・採点した。

言語流ちょう性検査:「かで始まることばをできるだけたくさん言ってみて」などの教示で、1分間の産出単語数を測定した。

### [研究2]

#### 身振り形態の変化に関わる要因の検討

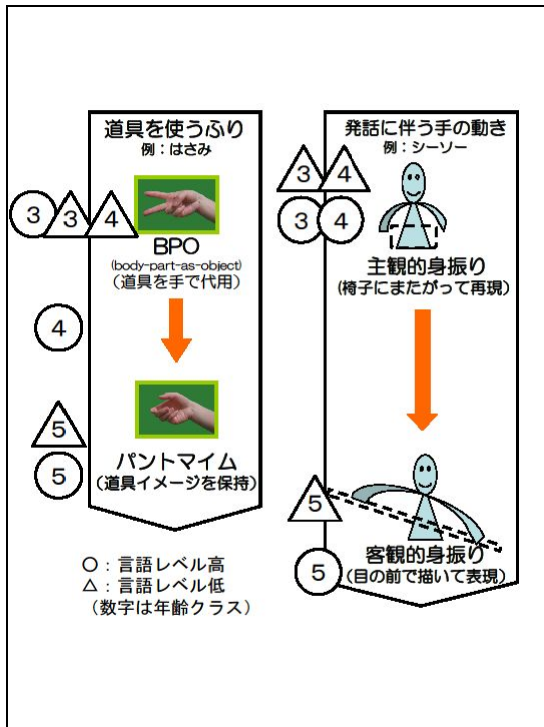
3～6歳の幼児(一部実験では4～6歳児)を対象として、個別面接実験を実施した。研究1を統制群とし、形態、文脈、他者視点を強調する群をそれぞれ実験群として設定した。ただし、については年少児向けの強調手続きが難しかったため、実験手続きを修正して別課題(構成課題・こころの理論課題)を実施し、これらの課題で測定される認知機能の発達との関連を検討した。

## 4. 研究成果

### (1)

同じ対象児で比較した結果、2種類の身振りの変化時期は異なり、かつ、言語能力によってそれらの変化の様相が異なることが示された。全体ではBPOからの移行は3～5歳児クラスで漸進的に進むのに対し、主観的身振りから客観的身振りへの移行はそれよりやや遅れ、5歳児クラスで増え始めることが示された。

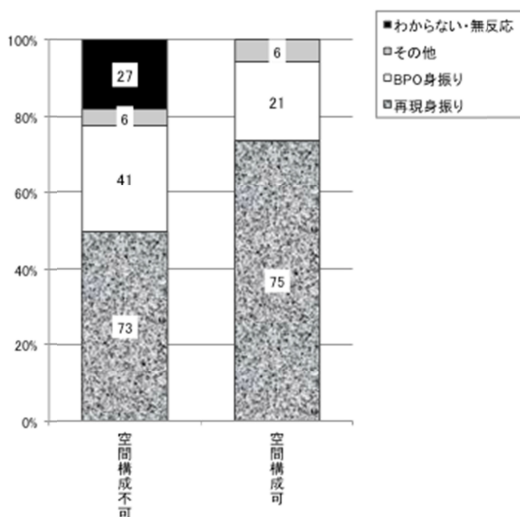
言語レベルでの違いとあわせてみると、道具操作のふり課題では、言語レベル高群では発達に伴って順次移行が進むのに対し、言語レベル低群ではやや停滞する傾向があった。一方、主観的身振りからの変化は、言語レベルが高い方が5歳児クラスで客観的身振りがより高い頻度で出現する傾向にあったものの、言語レベルが低めでも、3・4歳児クラスでは大差なく、5歳児クラスで客観的身振りが増加するというパターンは共通していた(下図)。



(2)

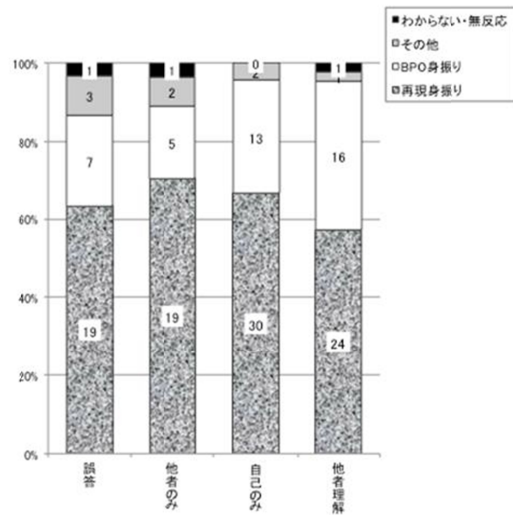
文脈を強調した場合は、それぞれの身振りパターンの変化が促進される傾向があった。また、構成課題、心の理論課題と身振りパターンとの関連を検討した結果、各課題の成績が高い群は語いテストを指標とした言語能力も高く、定型発達児では、全般的な認知発達が連動していることを示していた。その一方で、身振りに関しては、各課題成績が高い群で身振りの変化が先行するとは限らず、課題によって異なる結果となった。

構成課題では、成績が高い群で、手指を道具に見立てて代用する BPO 表現よりも、手指を構えた中に道具を想定して動かす割合が多くなっていった(下図)。



これに対して、心の理論課題との関連では、課題成績の高さと身振りパターンには構成

課題ほど明らかな傾向は見いだせず、むしろ他者の意図を推測できる群の方が、そうではない群に比べて BPO で表現するようであった(下図)。



定型発達の幼児を対象とする場合、言語をはじめとした全般的な認知発達・視空間認知能力・手先の巧緻性等の発達は、連動していることが多い。そのため、バイリンガル幼児を対象とすることで言語発達と認知発達を分離した Nicoladis, E., Mayberry, R. L., & Genesee, F. (1999)らを例外として、幼児期の身振りパターンの変化は、これらの全般的な発達と関連づけて解釈されてきた。

しかし、本研究の結果は、身振りの産出に関わるこれらの要因と身振りの関係が、身振り変化のパターンや言語能力によって異なることを示している。

特に、BPO 表現に関しては、本研究の対象児は、自分の道具イメージの補助としてではなく、他者の意図や視点を理解した上で、他者に示すために BPO 表現を用いた可能性がある。構成課題の成績で比較した実験では、成績が高い群でも「はさみ」での BPO 表現が多く、空間配置の難しさを示唆していた。一方で、心の理論課題で比較した場合は、他者の意図が推測できる群で、はさみだけではなく、指の形が単純な歯ブラシや包丁でも BPO 表現が観察された。本研究は 1 群あたりの人数が比較的少なかったため、解釈には限度があるが、これらの BPO 表現の使用は他者に見せるためであった可能性がある。客観的身振りの出現と同じように、他者の見えへの配慮として説明できるかもしれない。

はじめは自分のイメージの補強として BPO 表現を用い(構成課題における構成不可群)ある段階から、他者のために BPO 表現を使用する(こころの理論課題における他者理解群)と考えると、いずれの実験の結果も矛盾しない。この問題を検証するためには、実験手続上の工夫として、なぜそのような身振りで表現したかという方略使用を尋ねたり、実験者ではなく友達に話をする(説明する)場面を

設けて聞き手を強調したりするなどが考えられる。また、日常場面の友達とのやりとりの観察など、実験状況以外からも情報を収集することも有効であろう。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 2 件)

大神優子, 幼児期における道具使用身振り - 空間構成課題・心の理論課題との関連 -, 和洋女子大学紀要 (査読あり), 54, 87-96. 2014.

大神優子, 「幼児期の身振り表現の変化 - 身振りの視点と言語レベルによる検討 - 」, 和洋女子大学紀要 (査読あり), 53, 145-153. 2013.

[学会発表](計 0 件)

[図書](計 0 件)

[産業財産権]

出願状況 (計 0 件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年月日:

国内外の別:

取得状況 (計 0 件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

取得年月日:

国内外の別:

[その他]

ホームページ等

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

大神 優子 (OHGAMI YUKO)

和洋女子大学・人間・社会学系・准教授

研究者番号: 40452031

##### (2) 研究分担者

(該当なし)

##### (3) 連携研究者

(該当なし)